『比較民俗研究』11. 1995／3

納西族のヒツジ管理にみる家畜の命名と個体識別—予察—

安室　知※

はじめに

納西族にとって家畜飼養は重要な生計活動のひとつである。ウシ・ウマ・ブタ・ニワトリが基本的家畜として飼われ，そのほかにその村の立地する環境（生態条件）に応じて，ヒツジ・ヤギ・ヤク・モウギュウ(注1)，アヒル，ガチョウ，ハトまたときにはミツバチまで，多種多様な家畜飼養が行われている。

その特徴は，牧畜業として独立して営まれるものではなく，多分に農耕との複合関係の中で家畜飼養が行われることにある。ウシ・ウマなどの大家畜は農耕労働に用いることを主目的に，ブタ・ヒツジ・ニワトリなどの小家畜は農耕生活における自給的な肉・乳・毛皮を得ることを目的にしている。

そうした点については別稿に詳述するとして，ここでは主としてヒツジ(注2)の飼養を取り上げ，その命名法に注目して，納西族の家畜に対する認識と家畜管理のあり方についてみていくことにする。

納西族がヒツジを個体識別し，群れを管理する方法は，体毛の色とくにその配合のあり方によっている。この点は，体毛が黒と白の２色が基本となるヒツジの場合，納西族の民族性の中に現れる黒と白のカラーシンボリズムとも関係することであろう。

2　調査の概観

(1)調査地の概観

調査地は，雲南省麗江県太安郷天紅行政村の中の１自然村である汝寒坪村である。戸数約130戸（556人）の村で，住人のほとんどが納西族である。村は標高約3100メートルにある。麗江盆地の縁辺部の丘陵部にあり，麗江盆地にある納西族の集落の中では最も高いところに位置する。

生業活動の中心は農耕である。村の総耕地面積は4850畝(注3)であり，一人当たり8.3畝と太安郷全体の平均4.8畝に比べかなり多い。しかし，農業収入（年間純収入）をみると太安郷全体では１人当たり357元であるのに対して，汝寒坪村では平均421元である。それは，高冷地であるため土地生産性が低く，また主要な作物もジャガイモ・燕麦・そばなどの高冷地でも栽培可能なものに限定されているが，特産地となっているためである。

そうした農耕活動のかたわら，重要な生計活動のひとつとして家畜飼養が複合的に行われている。とくにこの村ではヒツジは重要な家畜である。ヒツジは麗江盆地の平坦部（標高2300～2500）

※横須賀市立人文博物館学芸員

ではあまりみられず，標高の高いこうした盆地縁辺部の丘陵地がヒツジ飼養の中心となっている。ここでもやはり他の家畜に較べて一軒当たりの飼養頭数は多い（後述）。

(2)話者の概観

この汝寒坪村に住む楊継清（64才）さんからヒツジ飼養についてはなしを聞いた。1994年9月27日のことである。

楊さんは12才のときからヒツジを飼っている。大東巴(注4)を父に持つ楊さんは，ほぼ独力でヒツジ飼養を行うようになった。

12才で初めてヒツジを飼うに当たっては，隣に住む老人からヒツジ飼養に関するさまざまな知識を授かった。具体的には，ヒツジを集める方法，畑を荒らさないようにする方法，ヒツジが畑に生みつけたニワトリの卵に触れないようにする方法などを教えてもらったという。

ヒツジ飼養を始めた当初は，ヒツジは7頭であった。その後，平均すると例年15～16頭を飼っている。最も多いときで32頭飼ったことがある。ちなみに，汝寒坪村においては，ヒツジの場合15～20頭が1戸当たりの平均的な飼育頭数である。

（楊さんが1994年現在に飼っているヒツジの頭数とその構成）

	雌	9頭
16頭……	雄（種ヒツジ）	2頭
	去勢雄	5頭

3　ヒツジ飼養のあり方

(1)ヒツジ飼養の一年

夏の午前中は草の生える平らな土地へヒツジを連れていって草を食べさせ，午後からは山の林で木の葉を食べさせる。こうした土地は村から東北方向に2キロほど行ったところにある。

秋は，収穫を終えた畑にヒツジを放して草を食べさせる。作物の収穫後に残る茎や葉がヒツジの飼料になる。ヒツジを放牧するには，とくに蕎麦や燕麦の畑がよいとされる。ジャガイモ畑の場合は，収穫前になると，ブタの飼料として茎や葉をすべて刈りとってしまうため，収穫後の畑ではジャガイモの葉ではなく畝に生えた雑草がヒツジの飼料となる。

畑へのヒツジの放牧は，納西族における家畜飼養と農耕活動との関係を考える上でとくに重要な意味を持つ。秋の収穫後だけではなく，春先まだ作物の植えられていない畑にもヒツジを入れる。その大きな理由として，そこには飼料となる雑草がいち早く生えることとともに，ヒツジの糞が畑の重要な肥料となることがあげられる。とくにヒツジの糞は畑によいとされる。

また，畑への放牧以外では，秋は山の谷へヒツジを連れていってブナの葉を食べさせる。わざわざブナの葉を人が採ってきて与えることもある。

9月になると標高の高い汝寒坪村には‘寒い雨’が降るようになる。そうなるとヒツジ小屋に入

れて家の近くで飼うようにする。ヒツジ小屋は家の外に建てる。一例としては，家の照壁(注5)に沿ってその外側（東側）に建てる。また，家の中の家畜小屋に入れることもある。

そうして翌年の１月まではヒツジ小屋でヒツジを飼うことになる。

ただし，冬の間ずっと小屋に入れてばかりいるとヒツジには良くない。雪があるときは外には出さないが，雪さえ降らなければ，訓練のために家の近くをまわらせる。

冬は飼料を確保するのが大変である。小屋で暮らす間の飼料としては，キャトゥ（白雲豆），ワントゥ（碗豆）などの豆類やカブなどの野菜物の不出来なもの，葉，莢を用いている。

汝寒坪村では，ヒツジを多く飼いたいと思っても，冬期の飼料が制限要因となっている。飼育頭数を増やせば，それだけ多くの飼料を秋までに準備しなくてはならない。前述のように，畑作物に冬期の飼料の多くを頼っているため，今以上に耕地が増え農業生産が上がらない限り飼育頭数を拡大することは不可能である。こうした面でも，納西族の場合，農耕と家畜飼養とは密接な関わりがあることがわかる。

また，冬の間は基本的に小屋の中でヒツジを飼わなくてはならないため，限られた空間の小屋ではやはり頭数も限られてしまう。

こうして冬が終わり，清明節の頃になるとだんだんと外にヒツジを出すようになる。清明節には気温も上がり，山野の草が萌え出す。そうなると山・平地（荒蕪地，未利用地）・畑にヒツジを連れていって草を食べさせることができるようになる。

清明節の頃はまだ畑には何も植えられていない。畑に生えているのは雑草だけである。そのため，自分の耕作する畑だけでなく，他人の畑にヒツジを入れてもよい。なお，秋も収穫さえ終えていればどの畑にヒツジを入れてもよいことになっている。

なお，ヒツジに食べさせてはいけない草木には以下のものがある。

ズンブ：納西語，漢語は不明。毒のある草。ただし，慣れていれば食べても大丈夫。初めて食べるとき気をつける。楊さんはそれでヒツジを死なせてしまったことがある。ヒツジも経験的に知っていてあまりこの草は食べない。

ムピュ：納西語，漢語は不明。木の葉。雨の降らない季節には食べてはいけない。

マダ：納西語，漢語は不明。毒性の強い木の葉。

また，飼料に関連していうと，ヒツジには塩を定期的に与える必要がある。ひと月に一度ずつ塩を水に溶いて与える。人が嘗めて塩辛く感じない程度の塩水がよい。濃い塩水を与えると羊毛に良くない。

(2)出産と去勢

ヒツジが発情するのは５月５日ころからである。交尾は自然に任せ，人が管理することはない。

群れにはたいてい１頭の種ヒツジ（雄）を入れておく。たいていは１頭だが，楊さんは現在16頭のうち２頭が種ヒツジである。

種ヒツジは４才までのヒツジを使う。それ以上の年になると，生まれてくる子ヒツジが良くな

い。5才になると，種ヒツジは食肉にされる。

種ヒツジには，元気があり，毛質（毛が長くて色つやがきれいなもの）のよい，単色（黒または白）のヒツジを選んで残す。毛色が白と黒の2つが混じったものは良くない。それにまつわる伝説もある（？）というが，詳しくは不明である。

子ヒツジは8月から10月にかけて生まれるのが普通である。11月や12月に生まれることもあるが，寒さのために死んでしまうことが多い。15～16頭のヒツジを飼っていると，年に5～6頭の子ヒツジが生まれる。そのうち2～3頭は死んでしまう。生まれてくる子ヒツジの雄雌の数は年ごとで違う。しかし，去年雌が多いと今年は雄が多いというように，長い目で見るとバランスがとれているという。

人はヒツジの出産にほとんど手出ししない。出産はヒツジ小屋で行われる。交尾同様，自然に任せる。ただし，まだうまく立てない生まれたばかりの子ヒツジが，母ヒツジの乳を飲もうとするときには，体を支えてやる程度の手助けはする。

なお，冬の間ヒツジを小屋に入れて飼うときには，子ヒツジのいるヒツジといないヒツジの群れに分ける。

生まれてきた雄のヒツジは種ヒツジを残してすべて去勢してしまう。去勢は睾丸を抜いて行う。納西語ではツジェという。ツは「ヒツジ」，ジェは「取る」の意味である。雄ヒツジは去勢すると太り，寿命が延びるとされる。また，雄の子ヒツジは，去勢して自分で飼うほかに，食肉にしたり売ることもある。

子ヒツジの睾丸を抜くのは，生後半年してからである。5月5日頃に行うことが多い。このころになると，子を生んだ雌ヒツジは乳が出なくなる。また，からだが元に戻り発情するようになる。それと平行して子ヒツジも母離れする。それは，子ヒツジにとってちょうど良い餌となる若草が大地に萌え出す頃でもある。

去勢は飼主自身が行うことが多い。おもに昼間に屋外で行う。楊さんは汝寒坪村で最も去勢が上手であるといわれているが，そうした人に去勢を頼むこともある。

睾丸を抜くときは，まずペニスの先をナイフで小さく切って捨てる。そうすると中に2つの玉が見える。指先に唾液をつけてからひとつずつ取り出す。その後また傷口には唾液をつけておく。唾液は薬である。ほかにつける薬はない。

取った睾丸は焼いて食べる。40才以上の人だけが食べることができる。若者は食べてはならないとされる。これを食べると精がつく。たいていは酒を飲みながら食べるが，睾丸の肉は少し臭みがある。

(3)ヒツジの売買と自家消費

例年，楊さんは15～16頭のヒツジを飼うが，だいたい年に5頭ずつヒツジを売る。売るヒツジは3才以上のものがほとんどで，子ヒツジを売ることはあまりない。ヒツジ1頭当たりの売値はかなりの額になり，全体として少ない農業収入に占める割合は大きなものになっている。

羊毛は３月と９月の２回刈り取る。羊毛は９月の方が多く取れる。質も良い。１頭当たり，９月は0.8～１斤(注6)，３月は0.3斤の羊毛が取れる。ヒツジの毛は生後２～３か月すれば刈り取ることができる。羊毛は自家消費するほかに売ることもある。なお，汝寒坪村のような高冷地では，羊毛で作ったフェルトのコートは必需品である。

羊肉は好きな人と嫌いな人とでは食べる量がだいぶ違う。そのため羊肉の消費量は家毎にかなりの違いができる。楊さんの家の場合，羊肉を好んで食べるのは楊さんひとりだけである。家族には家の中で羊肉を煮ることすらも嫌がられるという。そのため家全体としての消費量は少ない。楊さんの家では，いったん羊を売ってから，羊肉を別のところで買ってきて食べることが多い。楊さんの家の場合，自給的な意味においては，羊肉はそれほど大きな意味をもってはいない。

4　ヒツジの命名と管理

(1)ヒツジの識別と命名

楊さんは自分の飼っているヒツジはすべて識別できる。しかし，命名しているヒツジは一部に過ぎない。なお，目印にヒツジの首や体に何かつけることはない。

名前をつけるヒツジは，群れの中で行動がとくに目立つもの（一番先頭や一番後を歩いたりする）や，飼い主をてこずらせるものだけである。

人はヒツジの名前を呼んで群れ全体を動かしたりするが，そうしたとき先頭や一番後を歩く性質のあるヒツジに命名しておくことは，群れ管理の上で有効である。また，性質のやっかいなヒツジに名前をつけることは，一番頭や後を歩くヒツジの場合と同様に，たとえば群れから離れて他人の畑に入り込んでしまうようなときに，名前を呼んで叱り呼び戻す場面が想定される。

そのため，すべてのヒツジを識別することはできても，名前はそうした群れ管理上の要所となるヒツジのみにつけられる。実際，楊さんの場合，名前をつけているのは現在16頭のうち５頭だけである。

現在楊さんが飼っているヒツジの名前とその由来および身体的・行動的な特徴については，第１表にまとめてあるので，以下はそれを参照しつつ論を進めていく。

〔表１〕　楊継清さんの飼っているヒツジ

―名前とその由来および身体・行動的特徴―

ザホワ*	（名前の意味）ザ＝雑，ホワ＝花（または黄？）……漢語名 （性）雌。現在妊娠中，もうすぐ生まれる。 （毛の色）黒い体毛の中にまだらに白い毛がある。 （性質）群れの中でいつも一番前を走る。
ロホワ	（名前の意味）ロ＝？，ホワ＝花（または黄？）……漢語名 （性）雌？ （毛の色）黒い体毛，顎下に白い毛がある。

	（性質）群れの中でいつも一番前を走る。
ミュム*	（名前の意味）ミュ＝目，ム＝灰色 …… 納西語名 （性）雌 （毛の色）体毛は白，目のまわり（眉毛）が灰色の毛。 （性質）群れの中でいつも一番後ろを走る。
ナクパ*	（名前の意味）ナ＝黒，ク＝頭，パ＝白 …… 納西語名 （性）雌 （毛の色）体毛は黒，頭の中央に白い毛がある。 （性質）群れの中では前の方にいる。畑が好きで，人の畑に入って荒らす悪いヒツジである。
マパ	（名前の意味）マ＝尾，パ＝白 …… 納西語名 （性）雌？ （毛の色）体毛は白，尾が白い毛。
ナクギュ	（名前の意味）ナ＝黒，ク＝足，ギュ＝走る …… 納西語名 （性）雌？ （毛の色）体毛は黒，足首に白い毛が走っている。
レニナ* （レナ）	（名前の意味）レニ＝種，ナ＝黒 …… 納西語名 （性）雄（種雄） （毛の色）体毛は黒の単色。
レニパ*	（名前の意味）レニ＝種，パ＝白 …… 納西語名 （性）雄（種雄） （毛の色）体毛は白の単色。
ヘンド	（名前の意味）ヘン＝耳，ド＝半分欠けた（状態） …… 納西語名 （性）雌？ （身体的特徴）片方の耳が半分なくなってしまったヒツジ。
ヘレ	（名前の意味）ヘレ＝ルールを守らない …… 納西語名 （性）雌 （行動の特徴）いつも一番前を走り，すばしっこくて，ルールを守らないヒツジ。

＊：現在，楊さんが飼っているヒツジ。そのほかは，今までに飼っていたヒツジ。

(2)ヒツジの命名法

ヒツジの命名には毛色が重要な意味を持つ。命名は毛色の混じり具合が基本となる。ヒツジの毛色は基本的に白と黒の２色(注7)であるため，どちらかの色が体色の基本となり，そこにもう一色または別の特徴的な毛色（灰色や褐色）が模様として加わるという混じり方をする。

そのため，名前は「特徴となる部位＋その毛色」という２語の組み合わせにより作られるのが一般的である。ロホワ・ミュム・マパなどがそうである。また，一部だけではなく，体全体に毛色が混じる場合は，ザ（雑）やホワ（花）と表現される。(例，ザホワ，ロホワ)

また，これはすべてではないが，ナクパのように「基調となる体毛の色（ナ）＋模様となる毛のある部位（ク）＋模様となる毛の色（パ)」という順に３つの語で示されることもある。この場合，前にあげた２語による命名法は，３語による命名のうちの一要素である「基調となる体毛の色」の部分が省略されていると考えることもできる。

この他，身体的特徴により命名されることもある。ただし，こうした命名は特別である片耳の半分が欠けて無くなっている状態を示すヘンドはその一例である。なお，角の形や大きさで命名することはない。

また，前記のように，命名されるヒツジは行動・性質に特徴のあるものであることから，とくに目立つ行動をそのままのヒツジの名前にすることもある。(例，ヘレ)

命名される個体に関していうと，主として命名されるのは雌であることに注目する必要があろう。

雄の場合はたいていは種雄のみが命名される。名前はやはり毛色をもとにつけられるが，本来種雄は単色のため，前記のような毛色の混じり具合による命名はされず，単に白か黒というものになる。(例，レニナ，レナパ）これは正しくは固有名詞ではなく，白い種ヒツジ（レニパ）と黒い種ヒツジ（レニナ）という意味で，その雄が種ヒツジの役目を終え次の個体に引き継がれたときもやはり同様の名前で呼ばれる。種ヒツジは黒か白の単色のため，名前はこの２つしかない。

なお，命名については，ザホワ・ロホワのように漢語によるものとミュム以下のように納西語によるものとが存在する。この違いについては興味深いが明らかではない。

(3)ヒツジ群の管理

楊さんの場合，ヒツジの群れの管理に犬を使うことはない。楊さんは犬(注8)を飼っているが，狩りをするためのもので，ヒツジを追うためのものではない。ただし村のなかには犬を使ってヒツジを追う人もいるという。

人は手に竹の棒や鞭をもってヒツジを追って移動させる。竹の棒をムトゥと言い，棒にひもをつけた鞭をムピと言う。ムは天を意味し，ピはひものなる音を示す擬音語。こうした棒や鞭も普段はほとんど使わない。ヒツジが他人の畑に入ろうとしたり，群れから逸脱しようとするときだけに使うものである。

たいていは，草を食べにヒツジを連れて行くときは，ヒツジの方が心得ていて，いちいち人が追って行かなくても自分たちでそうした場所まで歩いて行く。

また，ヒツジは飼い主の言葉が分かるとされる。「止まれ」といえば，ちゃんと足を止める。また，飼い主の姿が見えないと，ヒツジは鳴き声をあげて自分から飼い主を捜すことすらあるという。

命名にみるように単純な管理のあり方とは反対に，こうした人とヒツジとの密接な関係も形成されていることは興味深い。

ひとつには，１戸当たり20頭弱という飼育頭数の少なさが，そうした〈人－ヒツジ〉関係を比較的容易に作りあげることを可能にしたということができる。すべてのヒツジに名前こそ与えないが，飼い主は自分の飼うヒツジのすべてを個体識別している。

納西族の場合，牧羊犬(注9)を持たず，また人為的な先導羊(注10)もいない。そうした点では，納西族のヒツジ管理は単純である。ヒツジを管理する上で最も重要な要素として，ヒツジのもつ行動特性としての群居性と追随性を上げることができるが，そうしたヒツジの持つ行動特性を生かしながら，管理は最低限のヒツジの認識により，群れを単位としてなされることに納西族のヒツジ管理の特徴がある。

その最低限必要とされる認識の対象が，先に掲げた，いつも先頭を走るヒツジ，一番後ろにいるヒツジ，畑に入っては作物をあらして困らせるヒツジといった個体である。こうした命名による個体認識は，ヒツジを個体としてではなく群として管理するのに最低限必要な情報となる。

楊さんの場合，現在飼っている16頭のヒツジのうち具体的な名称をもつヒツジは５頭に過ぎない。そのうち２頭は種雄である。そして残る３頭はまさに先に上げた条件にそのまま合致している。

5　まとめに代えて

松原正毅はトルコ共和国のユルック（トルコ系遊牧民）の例として，家畜であるヤギの個体識別と名称について詳細な報告を行っている（松原，1983：42～60）。それによると，300頭を越えるヤギについて飼い主はそれを個体識別し，さらにその１頭１頭に名前をつけている。具体的には，体毛の色名・体の部分的特徴・耳の形を指す語彙の組み合わせにより個体識別し，さらにそうして個体識別したヤギのそれぞれに，地名・人名・出所・出生時の状況・身体的特徴・性格や行動の特徴・体につけた付属物などによって個体名が付与されることを示している。しかも，ユルックは「すでに死亡した数世代前の母ヤギや，１頭の母ヤギが数年間にわたって生んだすべての子ヤギ」を覚えているという。

上記の遊牧民の個体識別と命名の体系に比べると，納西族のそれははるかに単純である。個体識別のあり方は，基本となる体毛の色名，特徴的体毛の分布箇所の組み合わせが基本となるもので，ユルックの場合とほぼ同じである。しかし，その命名の仕方は大きく異なり，納西族の場合は，命名は個体識別のあり方と一致している。また，命名される個体に関しては，納西族の場合はすべてのヒツジに対してなされるのではなく，先に上げたように，群れ管理に最低限必要な個体にのみ行われるものである。

また，家畜の命名の問題は，梅棹忠夫が指摘する（梅棹，1987：423）ように，西アジアのトルコ系遊牧民ユルサックや東アフリカのマサイのように，家畜に固有名詞をもつ文化と，モンゴル遊牧民のようにそれをもたない文化とがあるとされる。そうとなれば，単純とはいえ命名と個

体識別の文化を持つ納西族のヒツジ飼養は，従来言われているようにモンゴルなど北方遊牧民の影響よりも，むしろ西方の中央アジアの遊牧民の影響を大きく受けていると考えることができるかも知れない。

そこで注目すべきは，麗江の西方，揚子江源流域にあたるチベットの牧畜である。この場合，ヤギにおいてはより西方の影響が，ウシにおいては南方の影響が大きかったのに対して，北方的要素は比較的新しく吐蕃時代以降のものとされる（松原，1993)。また先に示したユルックにおける個体識別・命名の体系は同じトルコ系遊牧民である中国天山山脈北麓のカザク族にも同じものが存在する（松原，1993：巻末)。

こうした西方からの影響を示す事例とは別に，納西語が言語学的にはモンゴル遊牧民との関係（諏訪，1988：24）を説かれることも事実であり，納西族における家畜飼養の起源（文化的影響）をいかに位置づけるかは，今後の課題とせざるをえない。

おそらく，別稿で論じるように，納西族における家畜飼養は，生活様式としての牧畜（遊牧）とはまったく性質を異にするものであるとしなくてはならない。なぜなら，納西族の家畜飼養は，あくまでも農耕を生計活動の基盤とした上に行われるものだからである。

そう考えるとき，家畜管理のあり方（個別識別や命名の問題も含め）も，牧畜民のそれとはひとまず別のものとして扱う必要を感じる。牧畜民の家畜飼養と同様，今後は農耕民の家畜飼養も重要な研究テーマとなってこよう。とくに納西族の生業を理解しようとするときには農牧複合の問題は不可欠である。

[付　記]

なにぶん，本報告は，短期間の内になされたわずか一人の人からの聞き取り調査をもとに作成したものである。そのため，ここに上げた事例をもって納西族全体に普遍的なものであるとすることには大きな戸惑いがある。今後の調査事例の増加を待たなくてはならない。そういった意味で，あくまでも本稿は予察の域を出るものではない。

また，納西語の表記については，基本的に筆者が聞いた音をそのままカタカナ表記で記しておいた。そのため正確な納西語となっていないことを断っておく。

本稿をなすにあたっては，白庚勝（中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員）氏には，原稿に目を通していただき多くの示唆とご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

[注]

1）牛扁牛の字をあてる。ヤクの雌とウシの雄との交配雑種。

2）ヒツジはヤギとともに偶蹄目ウシ科ヤギ属に属する。紀元前7000年ころメソポタミヤの肥沃な三日月地帯の縁辺部の丘陵地で家畜化されたとされる。

3）畝（ムー）は面積の単位。1畝は約6アールに相当する。

4）東巴とは，納西族独特の民族宗教である東巴教の司祭のことである。東巴については多くの

研究があるのでそれらを参照のこと。

5）汝寒坪の家屋は現在多くは三坊一照壁の形式のもので，中庭を中心にして北側に家畜小屋が作られている。

6）斤は重量の単位。1斤は約600グラムに相当する。

7）『雲南省家畜家禽品種志』（雲南省畜産局，1987）によると，麗江で飼われる羊の代表的な品種である麗江綿羊では，毛色の割合は，白色58.61，黒色19.17，褐色16.67，褐色（雑花）5.55パーセントとなっている。

8）名前をショホワという。ショは漢語で小さい，ホワは黄色の意味である。ショは可愛いという意味合いもある。ヒツジ同様，毛の色が名前の1要素になっている。

9）牧羊犬とは，ヨーロッパにみられるように，ヒツジをまとめるといった群れ管理に犬を使うこと。また，南西アジアの例として，ヒツジが狼に襲われたとき狼と戦うために犬が連れていかれる（松井，1989：165）こともある。

10）先導羊とは，谷泰の報告（谷，1987）にあるように，去勢した雄を特別に人に馴らし，それを群れの先導役に使うことにより，結果としてヒツジ群の管理に使うもの。

参考文献

諏訪哲朗　1988　『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』　第一法規出版

松原正毅　1983　『遊牧の世界　上・下』　中央公論社

　　1993　「チベットの牧畜」　佐々木編『農耕の技術と文化』　集英社

松井　健　1989　『セミ・ドメスティケイション』　海鳴社

谷　　泰　1987　「南西ユーラシアにおける放牧羊群の管理」　福井・谷編『牧畜文化の原像』　日本放送出版協会

梅棹忠夫　1976　『狩猟と牧畜の世界』　講談社

　　1987　「Datoga牧畜社会における家族と家畜群」　福井・谷編『牧畜文化の原像』　日本放送出版協会

雲南省牧畜局雲南省家畜家禽品種志編寫委員会

　　1987　『雲南省家畜家禽品種志』　雲南科技出版社